

地方創生とブレイクスルー思考

阿南 修平

Abstract

Revitalization of local Area in Japan is very crucial issue and city where I live in is also facing such situation. I had a chance to be candidate of mayor last election and understand what is happening to our city. People is decreasing and medical care is increasing. Number of aged people is drastically increasing. Vitality of city seems to be losing due to lack of young people. Sooner or later , our city will be reformed and citizen will face high tax and cost. People escape from this miserable city. This paper illustrates how to revitalize city activities from point of break through thinking and emphasize the importance of change view point and escape from long trailed bondage in the society.

1. 各地方自治体の現状

日本は、世界的にみても類を見ない、少子・高齢者社会に向かっている。地方の衰退は、歯止めがかからず、各自治体では、移住・商品のブランド化、イベント対策等を推進している。しかし、いろいろな展開をしても、政府主導の地方活性化は、今までにない事態に対応できないのが現状である。まさに、自己を犠牲にするような大きな意識改革が、自治体を含む国全体に要求されているのではなかろうか。

2. 自治体の今後

当市も同様な状況で、急ピッチに人口減少、生産活動低下、高齢化が進んでいる。一方、持続可能な事業展開は少なく、成長への道が見えない状況である。今後、2～30年後には、住民が減少し、活力を失い、市の存続が危ぶまれ、益々地方は衰退、行政活動・生産活動・コミュニティー活動が維持できなくなり、市の存亡が危ぶまれる。このような現象は、日本全体にいえることかもしれない。まさに、江戸時代から明治時代という大変な変革の時を迎えようとしている。当時は、各藩においてはいろいろな藩校を設立、人材育成をはかり、明治時代の混乱を乗り切ったと思える。松下村塾や咸宜園等、そして長州ファイブで有名な英国への留学等、人材の育成は目に見張るものがあり、そのような人材が、日本の発展を推し進めてきている。今の日本、自治体では、市、県の状況を存亡の危機とみなしていないのが、大きな課題なのかもしれない。大都市では、近代化が急ピッチで進み、田舎では全くその恩恵がない。すごい生活の格差がしょうじているので、地方の人材は、大都市へ吸い込まれてしまい、益々、地方の衰退が進行している。このような、日本全体の発展の跛行性は、今後予測のつかないもっと大きなひずみを生じてしまうと思われる。現在の課題は、地方自治体だけの問題ではないのである。

3. 視点の大変革

地方創生に向けて、自治体全体で大きな意識改革が要求される時代になってきている。

行政の首長から、職員、そして市民に至るまで、一丸となって、少子高齢化時代を乗り越える必要がある。

自治体の状況では、すべての面で、跛行性をもち、全体をシステムとしてみた場合、効果的に機能できない、戦後時代遅れの発想で動いている。農業はどのような状況であれば、生活できるのか、稲作においては全く話にならない産業になっており、根本的な見直しが必要になっている。結果、農家を引き継ぐ人材は払底し、耕作放棄地は増加、山村が管理できない状況になっている。空き家は、急ピッチで増加しているのに、対策がとれない。生活ができないのが大きな原因なのである。そのような劣悪な状況では、政府がいくら補助をいれても、地方創生はあり得ない。原因と結果が真剣に検討されていないのである。少子高齢化、空き家増大、医療費増大、産業衰退、若者減少等、地方創生におけるすべてお互いがリンクしており悪循環に陥っている。現状の姿は、すべて我々の意識の投影、結果であろうと思われる。人間社会におけるすべての現象は、とくにリーダの意識が大きく影響している。江戸時代の米沢藩の上杉鷹山の治世は、正に範となるものであろう。視点の大変革が今こそ要求されているのである。長岡藩の小林虎三郎の米100俵による人材育成のような活動を行った結果なのかもしれない。

4. 地方創とブレイクスル-思考

過去延長戦からの未来はない、江戸時代から明治への移行は、正にそのような状況のなか、各藩がいろいろな考えをもち、争いながら、外圧を受けながらも、試行錯誤を行いながら、日本を引っ張ってきた。地方自治体における行政自身の軸足を、行政から業政に、中央の公助から自助・共助に、リーダ自らが意識をもって、範を示す必要がある。そのようなリーダがこれからの自治体にかぎらず、いろいろな産業分野で必要になってくる。そのような人材を、軸足をしっかりもち、精神の醸成した人材を育てることが急務である。また、多様な視点をもつ、あるいは、経験をして方が、市民を参画させ、それも持続可能な産業を興していくことが必要になってくる。

地方創生においては、自治体も含め、ビジネスモデルを構築して、どのようにすれば、生活できるのか、数字で分析する手法が重要になってくる。自治体においては、市民と意見交換をして、アイデアを出し合うが、アイデア集になってしまい、具体的な数字分析には全く至っていない。

予算ありきで、構築した施設を後でどのように使用するのか、検討するという手法は、高度成長期では許されるが人口減少が進み、地方が廃れていく中、しっかりと事業性を検証し、リスクを考慮、最大限の投資効果を出せるような、システム的な発想が要求されている。いまこそ地方の新たな自立精神が要求されているのである。地方衰退という炎が燃えている中、ゆでガエルにならないように、お湯から出て、寒風吹きすさぶ中、大変であるが叡智をだしてこの難局に立ち向かうしかないのである。それには、リーダをはじめとする意識改革と、若者を中心とした人材育成、今までとは異なった人材育成が必要なのである。

このような時期であるがゆえに、ブレイクスル-するような思考が必要なのである。

上杉鷹山の言葉に、「過ちを改めるのに、憚ることなかれ」があるが、今の日本に必要なことは、色々なしがらみに拘泥するのではなくするのではなく、間違っていれば、痛みを伴うが、大きく流れをかえる必要がある。この流れを変えるには、リーダの姿勢が重要なのである。もし、リーダが何かのしがらみで、中立的な判断が出せないようであれば、地方創生の取り組み自体、おかしくなってしまう。地方を創生するには、先を読んで、幅広い視点で、しっかりと軸足を持った方が、地方創生には必要であろう。